

地 神 塔

下川町内の公区会館や神社、道路の傍らに、『天照皇大神』と彫られた碑や『地神（ちじんとう・じしんとう・じじんとう）』と彫られた塔を見たことがありますか。これは『地神塔』とは呼ばれるものです。

地神とは、江戸時代の天明年間（1781～88）頃に京都の民間学者大江匡弼（ただすけ）の書いた書物や民間の宗教者を通して広まった民間信仰です。内容は中国での土地の神祭りをまねて、百姓が中心となり、道のほとりに地神塔を建てて、年2回の春秋の社日（彼岸の中日に近い戌の日）に土地の神を祭る地神講を行うと五穀豊穡、天下泰平、家内安全、子孫長久、無病息災になるというもので、瀬戸内海沿岸を中心とした西日本で広まりました。

碑の形は大きく2種類に分かれ、一つは五角柱の各面に『天照皇大神（あまてらすおおみかみ：太陽神）』、『太田命（おおたのみこと：猿田彦の子孫・道案内の神）』、『大宮姫命（おおみやひめのみこと）』、『保食命（うけもちのみこと：穀物の神）』、『大己貴命（おおなむちのみこと：大国主神、農業の神）』などの農業に関連する神様の名前が彫ってあるものと、もう一つは自然石に『地神』と彫ってあるものがあります。

今回紹介する塔は12ヶ所で、2種類の塔とも建立されています。五角柱は7ヶ所、上名寄生活改善センターや南部会館など、地神銘は5ヶ所、北町会館、幸成会館などに建立されています。年代は、上名寄生活改善センター横のものが大正13年で最も古く、下川神社にある『三之橋二十五線地神之碑』が平成5年に建立されています。